

氏名	信藤 勇一
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第128号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	歴史文化遺産の保存と活用の価値についての考察 -リビングヘリテージ継承と手法の観点から-
審査委員	主査 教授 藤本 英子 教授 田島 達也 准教授 坂東 幸輔 准教授 島田 陽 黒木 裕行（一級建築士）

## 論文の要旨

文化財保護法の改正が、2018（平成30）年6月に国会で可決・成立した。従来の保存主義重視の姿勢が、法改正によってこれまで以上に活用という視点が協調されるようになった。また2017（平成29）年12月の文化審議会文化財分科会企画調査会の第一次答申では、「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について」という文部科学大臣の諮問に対して「これまでの価値付けが明確でなかった未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域社会総がかりで、その継承に取り組んでいくことが重要」と示された。

そこで本研究では、歴史文化遺産の保存と活用の手法、取り組みに関して、リビングヘリテージ（生きた遺産）の先行事例の価値について調査・考察をおこない、また歴史的環境デザインの実証として、京町家の田中家（京都市下京区）での保存・活用の実証事例（大学の授業：テーマ演習）を通して、多様メンバー（京都市立芸術大学美術学部生）を中心とする多様な価値創造が保存・活用の重要な価値につながることを証明する。

本論文の構成は、序章（はじめに）、第1部（理論編）、第2部（実例編）、第3部（実証編）、結章（おわりに）で構成する。

序章では、「問題意識」、「先行研究」、「研究の目的」を述べる。

第1部（理論編）は、2つの章で構成されており、第1章では、「本研究の枠組と概念、方法について」説明する。続く第2章では、「様々な価値基準」と「本研究の価値基準」として、8つの価値

基準の実例を基に「本研究の価値基準」について説明し、第2部（実例編）において調査・考察に使用する価値基準の概念を示す。

第2部（実例編）では、第3章で「ヘリテージマネージャーについて」、第4章では、「歴史文化遺産の保存・活用とまちづくり先行事例」の調査・分析（先行事例より）と題して、4つのヘリテージマネージャー団体と4つの成功先行事例を説明して、第1部（理論編）で示した6つの価値基準の歴史的価値、芸術的価値、学術的価値、鑑賞的価値、社会的価値、経済的価値を用いて先行事例の分析・考察を行う。丹波篠山市「古民家の宿集落丸山」、姫路市「歴史と出会えるまち船場城西」、札幌市「旧小熊邸」、札幌市：「永山邸」の先行事例調査・考察した。さらに、第5章で「伝統・継承の活動事例の確認」と題して、伊勢市の「伊勢神宮遷宮」の継承、大阪市の「四天王寺と金剛組」の継承、海外：イギリスのヘリテージの継承についてもつけ加えた。

以上、4つの成功先行事例では、ヘリテージマネージャーに加え、関わる多様な職業や職能が成果を挙げ、多様な価値を見出していること、また多様な価値のバランスへの言及が重要であることを証明した。

さらに、第1部、第2部で行った価値基準の設定、価値の数値化評価、定性的分析のもとで得た知見により、第3部（実証編）では、第6章「歴史文化遺産活用とまちづくりの実践—京町家の活用—」と題して、テーマ演習の3年・4期にわたる田中家での保存・活用活動による価値分析、考察を行ない、実証研究を進めた。

筆者は、京都市下京区京町家の田中家でオーナーである田中堯氏、大学3年生、4年生、大学院生と共に、田中家の保存・活用のプロジェクトを立ち上げ、プロデュース、マネジメントに関わり実績をあげた。田中家の建物や周辺環境、まちなみのすべてを「歴史的環境」ととらえ、そこに環境デザインの観点から、保存・活用を通して参加する学生、様々な立場の関係者が様々な多様な価値を見出すことを実証した。また、本プロジェクトでは、家主（田中堯オーナー）が生活しながら、学生とともに授業及び歴史文化遺産活用の活動を行い、京町家を維持していく極めてまれな事例であることが実証できた。

この「京町家オーナーと学生で価値共創する京町家の田中家プロジェクト」では、活動実績自体が成果となるが、更に保存・活用団体である「一般社団法人 文化資産デザイン研究推進機構」の設立と、田中家での運営組織「学生リンク型/七条アトラボ」の立ち上げ、第6章の企画提案書に研究成果と今後の保存・活用の実践手法を盛り込んだ。

この「学生リンク型の保存・活用の継承手法」が、様々な価値を見出す保存・活用であることが確認できたが、今後も歴史文化遺産へのオーナーと学生（若者）との価値共創への関与が望まれる。

以上、事例「古民家の宿集落丸山」「船場城西の会」「旧小熊邸」「旧永山邸」「京町家 田中家」の保存・活用事例を考察したが、将来にわたり価値を見出し継承する関係者を評価し続け、単に保存のみに偏らず、社会的価値、経済的価値も含めた本質的な価値バランスを見守ることが、もっとも重要である。また、歴史文化遺産の歴史的な価値を理解し、リビングヘリテージを継承していくシ

ステム、人材、組織、教育の仕組づくりを最も重視すべきである。

今後の課題としては、地域社会総がかりで、その継承に取り組むためには、ヘリテージマネージャーのみでなく、所有者・利用者の深い理解と歴史観の共有が重要であり、関係者の価値共創にも言及し、多様な価値を共創していく。多様なリビングヘリテージの継承システムには、有形の指定文化財、登録文化財、歴史的建造物等と歴史的な景観や絵画、美術品、書物等、無形の芸能、民族、記念物、物語にも言及していくことが必要である。

## 審査結果の要旨

本研究は、歴史文化遺産にとって、どのような保存と活用の手法があるのか、また現代においてその役割を大きく担っているヘリテージマネージャーの課題から、今後のあり方について、実践を通じた検証から提言される価値の高い研究となっている。

信藤氏の研究は自身がヘリテージマネージャーであることから「歴史文化遺産の保存と活用の価値」について、ヘリテージマネージャーがどういった立場や職能であるべきか、という観点から始まり、先行研究、事例研究と京都市立芸術大学の移転先からも近い七条仏所跡京町家「田中家」での実践から、多様な関係者が多様な価値を見出していくべきという展開を経て、多様な価値創造が保存活用の重要な継承手法になりうる事を発見し、確認したものである。

今日の日本において、文化財の保存継承はいくつもの意味で困難な状況にある。

- ・都市化による伝統的家屋の消滅
- ・地方における空き家問題
- ・少子高齢化による文化財の担い手不足
- ・それらを補うべき公的資金の不足

そこで近年では保存だけでなく活用の視点が重視されるようになっている。

特に伝統的建造物は、その維持管理に非常にコストがかかるため、文化財保護法の2018年に改正で、「活用」という言葉が使われ出したが、それに見合う活用方法が切実に求められている。そこで保存と活用両面から関わる事ができる人材として、ヘリテージマネージャーの育成がほとんどの都道府県で導入されてきた。

こういった活用に関して、使われる言葉が「リビングヘリテージ（生きた遺産）」である。文化遺産として、単にそこに存在するだけではなく、引き続きコミュニティに対して意味のある文化遺産として、活かすための手法の開拓と、その継承が必要となってくるのである。その時に大きな役割を果たすのが、ヘリテージマネージャーである。

全国のヘリテージマネージャーは、その対象の規模や年代、周辺状況などが大きく異なる歴史的遺産に携わっている。また、知識や目的には共通項があるものの、その活動範囲や認識は大きく異なるといえる。

氏の研究による、ヘリテージマネージャーの設定条件、活動状況の全国調査から、ヘリテージマネージャーの各タイプの課題が見えてくる。

それはこれまでにない研究であり、また氏自身の活動経験を通して、多くのヘリテージマネージャーが抱える課題として、今後の活動のヒントになる可能性がある。そういった意味でも大変重要な研究である。

ヘリテージマネージャーはこのように非常に重要な役割が期待される反面、その位置付けや職能などについてはいまだ確立されているとは言いがたい、このことも都道府県別の氏の調査とヒアリングから、明らかになってきた。

氏は、博士課程中に「ヘリテージマネジメント」という書籍も共著で出版された。この本は日本初の「文化遺産経営」の教科書と呼ばれているが、このことから、この業界において日本のトップクラスの活動を実践されていると言える。

また、育成されたヘリテージマネージャーの活躍についても、今後さらに広く深く拡大していく事が望まれている状況にある。氏の博士論文はこのような点でも、まさに必要とされている研究である。

氏の論文における一貫した主張は、「文化財の保存と活用は専門家偏重ではなく、できるだけ多くの人に関わる事でその価値を高めていくべきである」というところにある。

そのためにまず、文化遺産の「価値」とは何か、という根源的な問題から取り組んでいる。

今日までに示されてきたさまざまな価値基準を収集検討した上で、重要文化財などの建築史的な価値だけではない、さまざまな側面から価値を引き出していくべきであるとして、「6つの価値基準」を提示する。

次に全国のヘリテージマネージャーのあり方を調査し、いまだ建築士中心のところも多いが、もっと多様な人が関われる仕組みも進みつつあるという現状を確認。

次に、多様な人の関わりによって多様な価値を引き出している成功事例を調査・分析。そこでは必ずしも専門知識を持っている人でなければ活躍できないのではなく、熱意を持って人を動かす人が必要であることや、収益を生むシステムの重要性を確認している。

「文化財の価値」は本来、数値で測りにくいものだが、氏はそれぞれの文化財に対し6つの価値に関わる人の数を指標として、歴史的建造物の価値のレーダーチャート化を行い、プロジェクトへのヘリテージマネージャーの参加率を示すなど、あえて定量的な評価を試みている。この点が論文中、疑問が寄せられたところでもあった。

現状ではアンケートを数値に変換する際の難しさや、サンプルの少なさなどから、十分納得できるものとは言いがたいが、単純な数値比較の説得力はないものの、アンケートの内容や、その結果を分かりやすく示す手法としては評価できるものとなっている。

今後、更なる提示の仕方の改善がされることで、更に活用できる指標となることを期待する。

本論文は幅広い資料を収集するだけでなく、多くの現場に足を運び、直接実態を調査し、そこに3年にわたる実践も積み重なっており、きわめて内容が濃いものとなっている。さらに論文構成も

「文化財の保存と活用は専門家偏重ではなく、できるだけ多くの人に関わる事でその価値を高めていくべきである」という一つのテーマが、各章において異なる切り口からくり返し検証され確認されていく、という構成になっており、非常に説得力が感じられる。

### 歴史文化遺産活用とまちづくりの実践～京町家の活用～ 実証編での制作成果について

田中家は現在も所有者が居住されている京町家である、その点が各地で再生活用される空き民家とは異なる。信藤氏本人の実践としては、京都駅近くの京町家である田中家を、本学のテーマ演習の舞台として、さまざまな調査研究や作品発表の場として3年にわたってマネジメントしてきた。これにより氏は、学生参加型の活用という一つの重要なモデルケースを提示する事に成功している。

展示では、3年間の企画プロデュース活動の内容と共に、生み出されたさまざまな発表物も展示された。

このように、対象となる学生が変わっても毎年の取り組みを積み重ねて、所有者との関係づくりを行ってきた点や、古民家を単なる古い家にとらえず、代々守ってきた人を大切に活動となっている。

そして、学生が年ごとに関わり方が変わってゆき、学生・所有者、双方の町家活用の経験値を増やしてゆく仕組みを実践している点など、大いに評価される。

まさに氏の主張である「文化財の保存と活用は専門家偏重ではなく、できるだけ多くの人に関わる事でその価値を高めていくべきである」を実践しているのである。

そして、ここが氏の研究の本質であり、他者のこれまでの研究・書籍では語られていない部分であると思われる。

また、「多様な関係者が多様な価値を見出していく」事が「成功」と論じられている点については、何を「成功」とするのかについて曖昧な状況ではあるが、大学が関わることで期待できる点の一つは、歴史文化遺産が解体される原因となる事が多い、固定資産税が免除されることである。

### 審査結果

このように、本研究は数値化が難しい分野での意欲的な研究であり。特に田中家での実践的な研究を博士課程の3年間で、実際のプロジェクトとして立ち上げ、「一般社団法人 文化遺産活用研究会」の設立と、運営組織である「学生リンク型 七条アトラボ」「暁の会」の設立による、京町家オーナーと学生で価値共創する活動は素晴らしい可能性を持つ内容である事が確認された。

また外部への発表として、日本建築学会での発表（査読有）、日本デザイン学会での発表、本学研究紀要への論文投稿、『ヘリテージマネジメント（共著）』の出版などの活動も評価できる。

上記を踏まえて、本審査では全員一致で合格とすることとした。